大岡 信

四季の歌 恋の歌

古今集を讀む

四季の歌 恋の歌

古今集を讀む

大岡 信

筑摩書房

四季の歌 恋の歌—古今集を讀む

昭和五十四年五月三十日初版第一刷発行

著者 大岡信

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九一—七六五一（営業）二九四—六七一一（編集）郵便番号一〇一—九一一 振替東京六—四一二三

印刷 明和印刷 製本 鈴木製本

©大岡信 昭和五十四年 Printed in Japan

〈〇〇九二〉—八三二五—四二〇四

装画 川上澄生「春の伏兵」

目次

1 古今集を読む前に 5
2 古今集の位置 25
3 古今集の撰者たち　序文 44
4 古今集の歌風と女性の力 65
5 四季の歌 春1 85
6 四季の歌 春2 105
7 四季の歌 春3　夏 125
8 四季の歌 秋1 145
9 四季の歌 秋2 166

10 四季の歌 冬　賀の歌　離別の歌　羇旅の歌　物名歌　186
11 恋の歌 1　209
12 恋の歌 2　233
13 哀傷の歌　雑歌　雑躰　大歌所御歌　255
あとがき　280

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

四季の歌　恋の歌

古今集を讀む

1　古今集を読む前に

文明の基本　子規の論難　鉄幹の自我の歌　郭公　水辺立秋
曙覧の独楽吟　文明開化　子規より遠く　四季感覚　古今集の
部立て　花橘秋月　季感紋切型辞典　恋の五楽章展開

古今和歌集をお読みになっているかなり大勢の方が同じような経験をなさっていると思いますが、私も最初、古今和歌集にいきなりとびついて、これは面白いと思ったのではありません。むしろ万葉集とか、新古今和歌集に非常にひかれていました。

古今和歌集について話が出ると、すぐに話題にのぼることですが、明治の俳人で歌人であった正岡子規が古今和歌集並びにその代表的な歌人である紀貫之について、徹底的に批判し否定しました。明治三十年代のことです。その後その評価がわれわれの中に浸透して、古今集あるいは貫之というのはつまらないという見方が一般的になりました。

実は私も、そういう評価に、あらかじめ、いわば汚染されていたということがあったと思います。実際、古今集を読んでみて、たしかに子規がいうような意味で、万葉集に較べると、ちょっと縁遠

い感じがする。万葉集ならピンと意味がわかるようなことが、古今集だと、少し考えてみないとわからないようなところがあって、とっつきにくいという感じがするのです。

十代の終りごろ、万葉集と新古今和歌集と、この二つに触れたときには、非常に新鮮な驚きを感じましたが、古今集については、時期的にも少々遅れて読んで、最初のうちは、正直なところちょっと退屈であると思ったことがあります。しかしその後、ものを考えたり書いたりしているうちに、古今和歌集というものが、実はわれわれの文化あるいは文明というものを形づくるものの考え方の基本に染み込んでいるのではないかということに、気がついてきまして、今では、古今和歌集の大きさということについて考えることが多くなっています。

今日は、専門の学者ではないにもかかわらず、古今集について、これから十三回お話するにあたって、私がどんな観点から古今集を読んでいるかということ、いわば序論をお話したいと思います。

正岡子規が、古今集および貫之について批判した言葉は、有名な「歌よみに与ふる書」という、明治三十一年に子規が何回も連続して書いた文章の第二回目に出てきます。

「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。其貫之や古今集を崇拝するは誠に気のしれぬことなどと申すものゝ、実は斯く申す生も数年前迄は古今集崇拝の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拝する気味合は能く存申候。」そういう書出しです。彼はかつては古今集というものが、いつでも歌をつくろうとする人びとにとって、手本だったので、自分も一所懸命やったんだ、しかし最近になってそれがつまらないということに気がついた、三年の恋も一朝にして醒めてしま

ったということを言っています。

子規の古今集攻撃は、たまたま子規の時代の人々が、和歌というものについて潜在的に感じていた不満を、非常に見事に言い切ったというものでした。人々はたちまち子規の評価に頷いて、古今集というものが、新しい時代の歌よみにとっては必要のない、また歌よみでない人びとにとっても必要のないものであるという考えが、一般的になったと思います。

子規より数年前に、やはりもう一人の有名な歌人であり、和歌の革新運動の一郭を形づくり、大きな影響力を及ぼした与謝野鉄幹も、明治の同時代の歌における古今和歌集風な歌の氾濫に対して、こういうものでは、新しい時代の自分自身の歌、つまり自我の歌というものはうたえないということをはっきりいっておりました。

正岡子規だけではなく、その当時の、新しく目覚めてきた歌人たちにとっては、古今集は、もう自分たちにとってあまり役に立たない集であるという常識ができていたといっていいのです。

事実、その当時の無名の青年であった人びとのうち、のちのち秀れた歌人や詩人になった人びとが、思い出のような文章で書いているものを見ても、自分たちにとって、和歌なんていうものは、まったくお話にならないくらい古いものであった。それを今さら子規とか鉄幹とかいった偉い人が、むきになって否定するのはどういうわけだろうと、むしろ不思議に思ったと言っている人もいるくらいです。

事実、その時代に支配的であった歌をいくつか眺めてみますと、正岡子規とか与謝野鉄幹が、こ

んなものはだめだといって否定しようとした、その理由はよくわかるような気がします。

そこでまず、古今和歌集の歌風のいわば延長線上でつくられていた明治時代の歌のいくつかを紹介してみます。

例えば、明治十年に出版された『明治現存三十六歌仙』という本があります。実は私は、その本の実物を見ておりませんが、窪田空穂さんの書かれた「新派和歌の成立」という非常に秀れた論文がありまして、その文章の中で引用されているものがかなりあります。例えば、当時の歌人の中で、非常に勢力のあった人の一人、三条西季知（さんじょうにしすえとも）という人がいます。この人はお公卿さんです。尊皇攘夷を唱えて幕府に嫌われ、七人の公卿が長州に追放された七卿落ちという事件が幕末にありましたが、その時の七卿の一人です。宮廷の廷臣として重要人物でありましたが、同時に歌人としても有力者で、明治になってから、もちろん政界に復帰して、宮中における歌の指導者の一人になりました。

この人のつくった歌で、こういう歌があります。「郭公（ほととぎす）」という題です。

めずらしといひし初音ののちもなほ飽かれんものか山ほととぎす

ほととぎすというのは、古今和歌集時代から、たいへん歌人たちに愛された鳥です。この鳥は冬のうちから春さきまでは、山のほうに籠っていて、初夏が来ると、夏を告げる最初の鳥として、麓へ下りてくると当時の人々は考えていたのです。その鳥の鳴き声を人びとは待ちこがれていたもので、そういうほととぎすがはじめて麓へ下りてきて鳴く。これが春から夏に移る季節の最初の合図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

と思われていました。ほととぎすの初音を聞くのは珍しい経験に出会う喜びを意味していました。

そこで、この歌ですが、ほととぎすの初音を聞いた、ああ珍しい、ほととぎすの初音が聞えたよと言いあった。でもそのあともなお、ちっとも飽きることがない、あの山ほととぎすの声は。こういう意味で、ほととぎすという、古い時代から愛されていた鳥を、改めてまた素材として持出してうたっているわけです。ですから古今和歌集の伝統に、そっくりそのまま添っている歌ということができます。

また、こういう人の歌があります。小中村清矩（こなかむらきよのり）。「水辺の立秋」。

澄むといふ空にかよへる水の上をけさよりわたる秋の初風

これは、非常にすっきりした歌ですが、格別新しい時代の歌というものではなく、やはり古今集的な、なだらかな、なめらかなよみぶりで、常套的な歌題である「秋風」をうたっています。「秋」の歌はまず「秋風」がたっところから始まるのが古今集以来の伝統でした。夏が去って今日から秋だという感懐を述べているこの歌、悪い歌ではないと思いますが、格別新しい感じもしません。

もう一人、海上胤平（うながみたねひら）という歌人がいて、この人も御歌所（みうたどころ）という宮中の歌の中心をなす部門の重要な一人でした。この人は万葉集を非常に重んじたようですが、歌のスタイルは古今風で、雉子をうたった歌があります。

ほろ〳〵とつばさこぼれて雨霞む巨勢（こせ）の春野にきぎすなくなり

これなども、雉子が、目の前にパッと現れた、あるいは雉子が目の前の草原を横切っていく姿に

ハッと驚いた、そういう目の前で雉子を見て感動した歌ではないのです。雉子の鳴き声を、雨に霞んでいる春の野原の別の場所で聞いているという風情で、目前に雉子を見ているのではない。雉子の声をやや遠くにふと聞いたということで、歌の本意としては、もののあわれ、趣き、そういうものをしっとりと心の中に感じてそれを楽しんでいる。つまり眼前で雉子がサッととび立つというような情景をじかに写しとっているわけではありません。理想的な意味での美しいものとは何か、という観念がまず中心で、雉子に材料をとってそれを述べている。雉子が目の前を歩いていく、あるいは雉子が目の前からとび立つ、そういう驚きそのものを直接に写すのではなく、雉子というものを口実にして、春の、雨が霞んでいるような野原の趣きある情景をうたっているのです。これがつまり「古今和歌集的」なうたいぶりなのです。

また、高崎正風（たかさきまさかぜ）という人がいました。この人も、明治時代に入ってからも有名な歌人でしたが、この人の歌で、花見に嵯峨の大井川に出掛けたときの歌があります。

大ゐがは春もあらしのさむければ千鳥なくなり花かげにして

この歌などは、紀貫之の有名な歌、ただし古今和歌集にはありませんが、貫之の歌でこれだけは正岡子規も趣味のある面白い歌だといって褒めた歌、

思ひかね妹（いも）がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり

の面影を写したものではないでしょうか。

「いもがり」というのは妹（いも）、恋人のところへということで、思いあまって、恋の思いに溢れてしま

って、自分一人では我慢できなくなって、恋人のところへ出掛けていく。そのとき、自分が辿っていく冬の夜空の下で、川風が寒く吹いて、そこに千鳥が鳴いていた。冬に鳴く千鳥は、声だけ聞いてもますます冬の夜風が身にしみるような鳴き声なのです。貫之のその歌を高崎正風は、冬の歌から春の歌にしていますが、やはり千鳥が、春のまだ冷たい風の中で鳴いている。それが非常に趣きがあるという形で、いわば貫之の歌をふまえてうたっているのです。

こういう種類の歌が、明治時代にはたくさんつくられていました。こういう歌が、明治の宮廷を中心とする歌壇では正統派の歌だったのです。

こんな歌ばかりだったかというとそうではなく、ぜんぜん別のタイプの歌をつくっていた人もいまして、ただ、その数は非常に少なかった。これは対照的に聞いていただくと非常によくわかると思いますので、一人だけ挙げますと、橘曙覧（たちばなあけみ）という人がいました。この人も幕末から明治にかけての歌人では有名な人です。

この人の歌の中に、「独楽吟」という五十二首の連作があります。全部、「たのしみは」という言葉を頭に置いている連作で、たとえばこんな歌です。今までよんだ何人かの、主として御歌所に関係のあった、いわば上流階級の歌人たちの歌と較べると違いがよくわかると思います。

たのしみは紙をひろげてとる筆の思ひの外に能くかけし時

たのしみは百日ひねれど成らぬ歌のふとおもしろく出できぬる時

百日もひねっていたが、ちっともできなかった歌が、ふと、あるとき、面白い出来映えでできた。

なんと楽しいではないか、ということです。

たのしみは心にうかぶはかなごと思ひつゞけて煙草吸ふとき

これなども、ありのままをただうたっていますが、素直に頷かれる心理状態です。心に浮かぶはかないことを思いつづけて煙草をふかしている。ただそれだけだが、それが楽しい。

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月(ひとつき)はよしというとき

これはまったく生活そのものです。曙覧は裕福な生活をしていたわけではありません。何人かの子供もいましたし、その日その日のやりくりに頭をなやませる庶民の生活をしていました。米櫃にだんだん米がなくなってきた、ところが、お米がまた手に入った、あと一月はなんとかこれでもっていく、そのほっとした気分。

たのしみはまれに魚煮て児等皆がうましうましといひて食ふ時

説明する必要もない歌で、こういう歌も、幕末に、つくられていたのです。しかしこういう歌は、表向きの、歌壇の中心の歌風ではなかった。正岡子規は、橘曙覧の歌が好きで、こういう歌を称賛し、その返す刀で、先程よんだような人びとの歌風をやっつけました。これらの人びとの歌の伝統は、ずっと古いところからきていて、その一番根本は何かというと古今和歌集である。その古今和歌集の中心人物は紀貫之であるということで、古今和歌集と紀貫之を、正岡子規は、たたいたわけです。

明治時代の新しい歌を開拓する人にとっては、千年も昔の人ですが、貫之とか、古今和歌集の伝

統をとにかくたたきつぶさなければ、新しい歌を押し出せなかった。新しい歌とは、曙覧の歌のような傾向を受け継いでいくことだった。ですから、正岡子規は、単に古い時代の歌を破壊しようとしたのではなく、曙覧のような歌、さらにはずっとさかのぼって万葉集までいく、その万葉集の伝統を復活させよう、万葉集を復活させて古今集をたたこう、こういうことだったのです。

今考えてみると、正岡子規がそう思わざるをえなかった理由は、非常によくわかります。明治時代は文明開化の時代ですから、いろいろな新しいものが、日本人の生活の中にどっと出てきた。当時の歌人は時代に追いつかなければならないと思って、そういう新しいものも、歌にしたのですが、古い歌のうたい方で新しい材料をうたうのですから、おかしなものがたくさんできてしまった。正岡子規はそれを見ていて、ばかばかしいと思ったのだろうと思います。

新材料は実にたくさんありました。国旗とか演説会とか時計とか牛乳とか祝砲（ドン）。お祝いがあるときに、今まではそんなことやったことないのに、明治になってからは祝砲を撃った。自転車が、キリスト教会が、あるいは郵便葉書というものができた。汽車とか汽船とか人力車とか、また、男も女も一緒に車に乗る男女同車という現象まで現れた。こういう現象はすべて文明開化の現象です。こういう文明開化の風潮や風俗を、旧派の伝統的な歌をつくっていた人びとも、うたおうとしたのです。

明治時代のはじめに、文明開化の新しい題材を集めて『開化新題和歌集』という本も編まれています。その中から一つだけ例を挙げますと、八田知紀（はったともので）という明治初期の代表的な歌人で、お弟子さ

んもたくさんいた人、かれが蒸気船をうたっている。蒸気船も、当時では新しい材料でした。

竜の馬に翅を添へて行くばかり足とき船もある世なりけり

竜は想像上の動物ですが、昔から空へ舞い上っていくものです。その竜をもち出してきて馬とし、それに翼をそえて、空を駈ける、そのくらいに足の早い船も出てくるような新しい時代になったものである、こういう意味の歌です。

蒸気船は幕末以来の新現象で、驚きをもって迎えられた。ところが、そういう驚きをうたうのに、まず第一に蒸気船という言葉を使わない。古い時代の竜というものをもってきて、それにたとえるのです。たとえるということは、古い時代の知識のほうへ、新しい時代の現象をひきずっていき、古い時代の知識の中で処理しようとすることになるわけで、そのものずばりではなく、説明的になります。そして方法としてはこれは、昔から日本の和歌の世界で行われていた題詠というよみ方の踏襲です。題材は新しいが詠法は伝統そのままなのです。

このような歌が、明治の十年代、二十年代までたくさんよまれ、影響力をもっていました。正岡子規のような新時代の人物、しかも遠く四国から出てきた覇気溢れる人はこれに我慢できないのは当然です。新しい時代の感受性で、新しい時代の感情をうたおうとする、そう思いたっている子規にとっては、こんな歌はまったくまだるっこしくてたまらなかった。子規は、何をしたかったか。直接感情に訴えてくるものを直接うたおうとした。言いかえると、知的、譬喩的な説明、つまり蒸気船のことを竜の馬に翼が生えたような船が出てきたというたぐいの説明をするようなことは、ば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.